

## 孫楷第

## 『述也是園舊藏古今雜劇』

工藤 篁

昭和十三年の夏戦火未だ熄まざる北京にて、著者孫楷第氏と久關を敍し歡談に時を移した夜のこと、談適、元人雜劇に及ぶや、最近上海に於ける二百六十九種の雜劇の發見が話題を賑はした。それより何とかして一見せんと諸方に問合せみるに、或は重慶側に持出されて長沙か昆明に在りと言ひ、或は未だ上海に秘せられるとて、發見の事も一場の噂に過ぎぬかと疑はれたが、幸に今般上海涵芬樓より孤本元明雜劇百十四種として印行せられ、又原本の覆刻より一足先に孫氏の詳細なる研究「述也是園舊藏古今雜劇」の世に出でたるは望外の喜と言ふべく、紛たる亂離の間に在りつゝも孜々として倦まざる孫氏の學究的態度は賞讃に値するものがある。

## 二

所謂漢文唐詩宋詞元曲と併稱せられる元一代の盛果たる元人雜劇は、僅々百年の間に幾多の英才の輩出するありて支那文學史上の一巨觀を呈せるも、文運の衰微とともに多くは散じ盡して、元人雜劇總計幾本有りしや、文獻已に徴すべきなく、正確なる數を知る事は不可能である。元至順の初鐘嗣成撰する所の錄鬼簿に雜劇名目凡そ四百五十餘本を存し居るも、鐘嗣成が習知せる一部の人士及び先輩著名なる者の手に成るもののみを蒐録せる爲、これを以て元一代の戲曲總録と考ふるを得ない。明洪武の寧權王撰太和正音譜には、羣英雜劇目錄五百卅餘本、古今無名氏雜劇目百十一本、合計六百四十餘本の名目を留むるも適、篋底に在りしものゝ著録にして、これ亦元人戲曲の總録とは爲し得ないのである。明初は元を去ること未だ遠からず、元人雜劇の流傳するもの多々有り、宮中に藏せらる戲曲のみにても莫大な數に上りしものゝ如く、洪武初年親王の國には必ず詞曲千七百本を賜はれたと言はれ、或は又成化・正徳間の諸帝は雜劇及び散詞を聴くを喜び、海内の詞本を搜羅し、進むる者有れば之を厚く賞せられし爲、楊循吉・徐霖・陳符等の獻する所は數千本に止まらなかつたと言ふことである。されば上の好む

處下之に従ふで民間私藏の祕曲も量り知られず、嘉靖中李開先  
 は自ら誇稱して曰く「金元の詞曲芙蓉・雙題・多月・倩女等千  
 七百五十餘種は其の品類を辨せざるものはない」と。則ち開先  
 藏する所の元曲は殆ど内府の域を摩するばかりである。萬曆年  
 間に至れば餘兆の孫鏞は「金元雜劇甚だ多し、今吾が姚孫司馬  
 の家三百種を藏す」と稱せられ、萬曆末には吳興の臧懋循家藏  
 の祕書及び黃州の劉延伯より借用せる二百五十種の中より元曲  
 選百種を撰し、常熟の人錢曾は也是園書目に古今雜劇三百四十  
 二種（言ふまでもなく今回發見せられた雜劇は錢曾の舊藏であ  
 る）を録する等、内府は勿論私人の藏書も、多くして千餘種少  
 きは數百種と、當時儲藏の豊かなる人をして羨慕置かざらしむ  
 るものがある。然しながら清朝に及ぶとともに朝野に洽かりし  
 元人雜劇も漸く散佚の一路を辿り、數次の戰塵に焚かれて傳聞  
 することも稀となり、今に於ては僅かに臧氏が元曲選裏の九十  
 四種、輒近影印せられたる元刊雜劇卅種中の孤本十七種計百十  
 一種の寥々たる有様となつた。（註三）

### 三

今を去る十餘年前丁祖蔭なる者有り、北平圖書館月刊に「海  
 虞の趙氏舊山樓に於て也是園の曲を見た。一覽して其の跋語を

### 書評

録し勿々にして歸したが今は流落して何處に在りや」と報告し  
 て來た。當時の學界は也是園錢曾舊藏の雜劇が未だ健在なるを  
 知り、此書の人間に現れる日を待つたのであるが、丁氏の報告  
 も曖昧であり、遂に單なる噂に歸し、若し此本にして湮滅せん  
 か、明人以來僅かに傳來を知られたる元人雜劇も完全に埋没せ  
 られてしまふであらうといたく惜しまれたのである。

所が何たる幸ぞ、民國廿六年の日支事變は全土を擧げて戰場  
 と化し去り、故家の文物は蕩然として盡きたるも、時には戰火  
 を免れ門外不出の逸品の却つて世に出づる事もあり、也是園舊  
 藏古今雜劇は遂に上海の市場に姿を見せたのである。實は前述  
 の丁氏の藏に歸しあたる本書は、戰塵を被りし丁氏の没落と共  
 に、書賈は重價を以て蘇州より購ひ來りて人の耳目を聳動し、  
 吾々の噂に上る程の評判となつたのであるが、その後行方の知  
 れなかつたのは、一年近く鄭振鐸氏の齋中に秘せられてゐたか  
 らで、最後には結局北平國立圖書館の有に歸して、喪亂自り以  
 來、人其の羣を離れ、物其の主を易ふ。遇する所至りて酷し。  
 而して斯書乃ち獨り其所を得、此自り永く塵封銅閉の處を絶つ  
 たのである。

### 四

孫楷第氏は民國廿八年八月上海に遊び、此書を凡そ三週の間  
に閲し了り、其後再度遊滬して研究を續け、同年十二月には其  
業を終へたと言ふ。

「述也是園舊藏古今雜劇」は上下二篇に分たれる。上篇は、  
「收藏の經過」と題され、該書に散見せる諸家の藏書印に據り  
收藏しむたる諸名家を推定し、其の略歴と收藏に至る迄の經過  
を精細に考證する。此書は明萬曆年間の人趙元度（琦美）の搜  
集せるものである。琦美は萬曆四十二年より三年の日子を費し  
明室内府藏本及び東阿・于小谷藏本を鈔校してより、今に至る  
迄三百廿五年、其間主を易へ處を變ふる實に十一家に及ぶ。先  
づ琦美の手より離れて錢謙益の有に歸し、清・順治・庚寅の年  
絳雲樓の失火の際にも悉くは佚せず、繼いで錢曾也是園の藏す  
る所となつて也是園書目に著録せられて人に知られ、嘉慶の頃  
には有名な藏書家黃丕烈の有に歸し、光緒の初年には趙琦美の  
手を出でて約二百六十年にして、再び其の末裔趙宗建の家に歸  
し、趙氏より丁祖蔭を経て國立圖書館に收藏せらる。宮中の府  
庫より出で、三百廿餘年にして再び國家の庫中に保管せられし  
轉々流變の跡を迎れば、眞に奇しき運命の下に弄ばれたるもの  
と言はねばならない。

上篇收藏の經過こそは、嘗ては中國通俗小説書目や三言二拍

源流考等に力量を發揮せる孫氏の最も得意とする所にして、吾  
吾はたゞ其の考證の詳細にして甚だ根氣のいゝのに支那人なら  
ではとの感を深くするのみである。

## 五

下篇はかくて傳來せられたる雜劇の研究に費される。

先づ「今本の歴史」の項にては、上は明の萬曆より下は清の  
同光に及ぶ三百二十餘年、十一家に藏せられたる流轉の間に於  
ける、冊籍の多寡、雜劇の存佚、及び書冊往返盈虛消長の跡を、  
錢曾也是園書目及び黃丕烈の古今雜劇目に依りて明かにし、趙  
琦美原鈔校の時には果して幾種の雜劇を含有せるや不明なるも  
刊本を除き抄本のみにて少くとも二百四十種以上は有りたるべ  
し、今日文獻に徴して確實に推定されるのは也是園の有に歸せ  
る時には三百四十一種ありし事なり。然るに黃丕烈の時になれ  
ば其の五分の一を失ひ、趙宗建の時代には三分の一が失はれて  
ゐる。今冊籍を以て言へば也是園の時は舊本八十五冊にして、  
黃丕烈に至れば其の十三冊が失はれ、宗建に於ては廿一冊を缺  
く。蓋し古籍は日に久しく散佚し、時代降れば古書の存するも  
愈々稀となるは當然である。但し康熙四十一年錢曾歿して嘉慶  
九年丕烈得書に至るまでの百二年間に五分の一を失ひ、道光五

年丕烈致して光緒初年趙宗建得書に至る四十九年の間に十二分の一が失はれてゐる。時久しければ佚する事も多く、時短ければ佚する事も少いのは當然の理であるが、怪しむべきは前百年は豊亨豫大の中國の極成期であるのに反して、後四十年は太平天國の亂に際會せる中國の一大破壞期にして、舊物の存する亦稀である。如此承平無事の時に損失多く、紛亂の時に當つて佚散は却つて少い。此の理由を孫氏は斷じて、清の乾隆中屢詔を下して錢謙益の書を禁じてゐる。故に嘗ては謙益の有であつた此書には當然彼自らの批注の字が有つたであらう。當時帝王の禁令の苛刻なる批注本なりとも藏し居れば、其の罪は斬に値するのであるから、明末の王朝交替の大變動や、順治年間絳雲樓の劫火、太平天國の大亂に際してさへ甚しくは亡失せざる斯書も、承平無事の際に於ける「古稀天子」の御宇の時には、遂にかゝる厄難を免れ得なかつたのであらう。是れ則ち專制時帝王の威力は、其の文化を摧毀すること兵火よりも甚しきは、誠に人の意外に出るものがある。

次に現存六十四冊、雜劇總數二百四十一種の種類を行ひ、第一の抄本に屬する者百七十三種中、内府本より録せる者九十五種、于小殿本卅三種、其他の鈔本四十五種の由來を述べ、第二の刊本六十八種中、明息機子刊元人雜劇選本より出る者十五種

新安徐氏刊古名家雜劇より出る者五十三種なるを明かにし、最後に「今本の價值」の項に於て、斯書の支那文學史上に寄與する幾多の事項を擧げて、今回の發見の重大なる意義を力説する。

其の一は新出古今雜劇二百卅五種中より孤元人雜劇卅二種を撰び出して、既知の元劇百卅三種を増して百六十五種とする所に斯書の價值を認め、二百以上の巨帙ながらも、却つて元劇は七分の一しか包藏されぬ處に、元劇の得難さが知られるではないかと言ふ。其の二は斯書は明人雜劇中從來未見の書を多量に含有してゐる。かゝる例は稀なることで、傳本の全くない明人雜劇孤本は今や百種近くが世に出たわけである。近世支那戲曲史は是を以て一層の精彩を増すであらう。又孤本ならざる百三種とても、在來の本とは別系統に屬する者であるから、彼此校合することによつて、定本の作成が容易なものとならう。其の三は從來の戲曲に屢々現はれてはゐるが、未だ充分の解釋を與へられなかつた折・楔子・開・砌末・竹馬・路伎・書會・捷譏・引戲等の戲場の術語を解明して王國維宋元戲曲史の缺を補ひ、更に也是園本題橋記の流布本と異りて頭書に外末按喝の事を記せることより、按喝・開喝等演劇史上未だ聞かざる新事實を明かにしてゐる。

## 六

孫氏の研究は以上の如く三つの主題に集中せられる。其一は藏書家の歴史であり、其二は書誌學的研究であり、其三は戯曲史料の指摘である。前二者には甚だ密にして、第三の主題に於てはやゝ疎である。前二者は孫氏の得意とする所であり、後者は氏としてはとにかく新境地の開拓である。孫氏の如き學風は新資料の發見せられし曉には大いに其の精彩を發揮し得るも、資料には限りがあり、所謂太平無事の世には徒に手を束ねなければならぬ。孫氏の行詰りは夙に吾々の憂ふる所であつた。だからこそ今回の研究に於て新なる方法の展開を期待したのであるが、一讀の後多少の物足りなさが無いわけでもない。氏の如く近視眼的研究者は次の資料の發見までは、爲す所を知らぬであらう。此書は何か重大な事を落してゐる。也是園舊藏雜劇を手にした孫氏は仔細に眺め廓大鏡にかけける。然しながらそれは表紙と目録の部分に止り、肝心の雜劇の部は忽々に一瞥して偶然に目についた演劇資料を第三部に投出したような氣がする。孫氏は僅か三月しか見るを得なかつたのだからと言つて、一年も齋中に留め置きし鄭氏を羨望する。三月ととも短きに失するわけのものではあるまい。要するに孫氏の學風の前進を意圖し

つゝも結局敗北した姿である。これは孫氏一人の罪ではあるまい。今の支那文學研究は清朝考證學風の餘弊たる職人的技術に溺れて文學研究の何者かを求めんとしつゝも、結局何も把握し得ないのである。歐洲文學研究に比して餘りにも幼稚なる段階に在る支那文學研究は、支那人の手に在る限りこれ以上の進展は望み得ないような氣がする。結局吾々が支那人の業跡を踏臺としつゝ新境地の展開に努力せねばなるまい。東洋史の部門に於ては、幾多の先輩が日本の史界を世界的水準にまで高め得たるにもかゝらず、支那文學の遅々たる姿は結局吾々の怠慢に歸すると言はれても仕方がない。

今吾々が若し孫氏の研究を土臺とすれば元明雜劇の研究は容易なものとなるであらう。此意味に於ては孫氏の書の價値は大きい。

註一 北平圖書館發行、圖書季刊專刊第一種、本書の出版は民國廿九年十二月になつてゐるが、外國書の輸入の遅れるのは支那も同様で、最近入手する機會を得た。

註二 其後、明・息機子刊元人雜劇選、玉陽仙史編古名家雜劇、元明雜劇と相繼いで世に出たが、結局廿二種の新曲が附加せられたるに過ぎない。